

唐突に始まったマイク  
ライフ～最初から  
チートアイテムが手元  
に！？～

トパー

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

主人公の「俺」（名前を付けるつもりはありませんでしたが「サツキ」と名前をつけさ  
せていただきます。ですが、主人公の名前に限らず自由に読んだ頂いて結構です。）とそ  
の友人の「シノブ」がマインクラフトの世界に入ってしまう話です。

マインクラフトの世界に行ってしまい驚く二人ですが、なぜか二人と一緒にマインク  
ラフトの世界に来ていたVRのヘッドセットが姿を変えると…：

はじめての作品なので不満点等たくさんあると思いますがそれを踏まえて呼んでい  
ただけると幸いです。また、気付いた点がありましたら、どんどん教えてください。そ

の点が修正できそうであれば修正していくことはもちろん、今後の参考にしていきたいと思います。

残酷な描写は入れていないので戦闘シーンなどでは配慮しているつもりですが、入れたほうがいいなって思つたら教えてください。そういう人が多かつたら入れようと思います。

# 目 次

マイクラиф るんだろう？	1日目	＼俺たちどうな
マイクラиф	2日目	＼やつと到着し
た村だけど何かおかしい！？	8	
マイクラиф	3日目（前半）	＼明かさ
れる村長の秘密！？		

# マイクラライフ 1日目 ～俺たちどうなるんだろう～

「おお、中々いい感じじゃないか？」

俺の目の前に広がっているのは、美しい青空と、穏やかな草原。だが、それは現実ではなくゲームの世界。

そう、俺は今最近人気のゲーム「Minecraf t」をVRで遊んでいた。  
俺が動作の確認をしていると隣から声がかけられた

「おい、いつまで確認してんだよ。そんなことばっかしてないで、早く遊ぼうぜ。」

ああ、忘れてた。そういうふもいたんだつた。さつき俺に声をかけたのは、俺

の友人のシノブだ。今日は二人で遊ぶ約束してたんだつた。

「それもそうだな、今日はなにする？」

シノブ「なにかするにしても、まずは拠点がないとな。」

「そうだな、じゃあ木でも切りに行くか」

なんだかんだで、俺達は簡単な拠点を作り、ちょっと休憩をしていた。  
拠点を作つているときからなんだか気持ちが悪くて、さつきシノブには今日はあまり遊びなさそだと伝えたら、

シノブ「そうか、それならしようがないな。一応お前の分も合わせて準備しておくよ。  
次遊ぶときまでには、何するか考えておいて。」

といつて拠点の奥の方で作業をし始めた。俺も簡単な作業くらいはしようと思つて動いたとき、バランスを崩して転んでしまつた。イスに無理な姿勢で座つていたのが原因だろう。かなり焦つたが、無事に手をつくことができた。しかし、それとほぼ同時に通話していた、シノブの声が聞こえなくなつた。それだけでなく、ゲームの音声も聞こえなくなつた。

「やべえな、コードが引っ張られて断線してなければいいんだけどな。」

そう言つて、コードを優しく引いてみると、ただ、コードが抜けただけのようでコードを付けてしまえば問題は簡単に解決できそうそうだつた。しかし、そのとき部屋が冷えすぎていることに気付く。

「夏だからって、窓全開はまずかつたか。それにしても、今日は風が強いな部屋にまで吹き込むことは今まであまりなかつたのに…」

「しようがない、ヘッドセットを外して窓閉めに行くか。このヘッドセットつけるのめんどくさいからあんま外したくないんだけどなあ」

そう言つて、俺がヘッドセットを外すと目の前には美しい青空と、穏やかな草原が広がつていた。

なつ、なんでヘッドセットを外したのにゲームの画面が見えるんだ？  
ためしに頬をつねつてみたが痛い

「夢、じやないか」

間違いないシノブの声だ。

「おーい、シノブ。大丈夫か?」

俺がそう声を掛けると、

シノブ「ああ、問題ないよ。お前の方こそ大丈夫なのか？急に通話から抜けたからおどろいたぞ」

やはり、俺は通話から抜けていたのか。というかこの世界は何なんだろうか。それ  
を、シノブに聞いてみると

「ありえない」としか考えられないが、俺達はMinecraftの世界に来ているんじゃないか?」

やはり、シノブもそう思うか。このヘッドセットだけが一緒にこの世界に来たみたいだ。でも、この世界では役に立たなそうだな。そんなことを考えていたら、床においていたヘッドセットが段々とドット絵のようになつていく。そして、どんどん荒くなつて

いき、最終的には一つの手のひらの大きさほどの立方体になつた。

俺がその立方体を手に取るとヘッドセットだつた立方体は再び姿を変え始め、今度は眼鏡のような形になつた。その眼鏡をかけてみても特に変化はない。しかし、シノブの方を見たとき、俺にはシノブのHPなどの情報が見えた。しかし、その情報はすぐに消えてしまつた。どうやら、その情報を見ようと意識していないと見えないらしい。

シノブ「おい、どうした？ いきなりヘッドセットが姿を変えたけど。」

「シノブもヘッドセットがこつちに来てないか？」

シノブ「ああ、来てるな。ちよつと見てくる… あつ！ 俺のも変わってる！」

シノブが奥でいろいろしてゐる間に俺もこれで何ができるか確認してみるか。シノブを対象にしたときはHPなどの情報が見れたけど、ブロックなどを対象にしたらどうなるんだろう？ そう思つて、拠点の壁に使われている木材を見てみると、耐久性や木材を作るレシピ、木材を材料として作れるもののレシピなどが見れた。

「レシピまでわかるのは便利だな。」

そんなことを考えていると奥からシノブが戻ってきた。シノブの使つていたヘッドセットも眼鏡型に変わつたようだ。

シノブ「これすごいな！ これを使えば周りにいる生物の位置が把握できるみたいだぞ！」

「あれ、俺のやつはそんな事できないんだけどな。シノブ、ちょっとこの壁を見てくれ」

シノブ「この壁がどうかしたのか？もしかして、お前にはなにか見えてたりする？」

「ああ、俺にはこの壁の材料である木材の情報が見えてるんだ。逆に俺はシノブのよ

うに周りにいる生物の位置が把握できない。この2つで得られる情報は違うのかもな」

シノブ「そうだな、じゃあお前はあそこにいる羊を見ても何も情報は得られないのか？」

「そうだな、俺のやつは人とブロック。シノブのは生物って感じか。でも、人の場合でも位置だけはわかるって感じか。」

シノブ「そんな感じだな。ちなみに一度見たことのある生物は位置を把握したときにはこの生物はなにかというのも把握できるみたいだな。ちなみにここから東に行つた方に人の集団があるんだが、行つてみないか？」

「そんなことまでわかるのか。多分村だろうし行つてみるか。ちなみに距離とかはわかるのか？」

シノブ「悪い、それはわからないな。探知できるギリギリの距離っぽいし、これも集団が大きいから拾ってるだけで」

なるほど、そんな感じか。でも把握できる範囲がわからないと不便だからな。把握できるギリギリのところにいる生物を教えてもらつてそこまで行つてみるか。範囲が広

そうだつから別の方法を考えればいいし。

「よし、じゃあ俺が距離を調べるから、把握できるギリギリのところにいる生物の位置を教えてくれ。」

シノブ「りょーかい、えつと、あつちの方向に羊が2体いる。それがギリギリって感じかな」

俺がシノブの指した方向に進んでいくとたしかに2体の羊がいた。さて、ここからどうやって距離を測ろうか。その時俺は、近くに割と長い木の枝が落ちていることに気付いた。俺の眼鏡の能力で長さとかもわかんないかなあと想い、見てみると木の棒の長さは1mほどだとわかった。シノブのもそうだけど、すごく便利な能力だなあ。そうして、俺が棒を使って測つて見るとだいたい200mであることが分かった。

シノブ「そういえば、お前が測つてくれてる間も把握してたんだけど、体感的には半分くらいのところでお前の反応を失つてたんだよね。だから、同じ種類の生物がいればいるほど遠くにいても把握できて、その距離はその種類の生物×100mって感じだと思う」

「なるほど、一応聞いてみるが、その村にはどのくらいの数が集まつてゐるかはわかるか？」

シノブ「正確には把握できないけど、今までの感じと比べてみると…あれ、なんか

距離が出てる。8kmくらい先だつて

「その能力は学習できたりするのかな?」

シノブ 「多分そんな感じだと思う、お前はそんな感じあつた?」

「ああ、あつたな。じゃあ、使つていけばそれだけ便利になつていくのか。なんかすごうだな。」

シノブ 「そうだな、そろそろ夜になるし、出発は明日にするか。」

「そうだな、じやあまだベッドも作つてないし、床で寝るか。」

シノブ 「だよなあ、しようがないな。おやすみ」

そうして、俺達の唐突に始まつた生活は無事に1日目をおえようとしていた。半日とはいえ慣れないことをしていたせいかこんなにも寝にくい場所にいるにもかかわらず眠気がやつてきて、俺はそのまま寝ることにした。

# マイクラライフ 2日目 やつと到着した村だけど何かおかしい！」

俺は無事に朝を迎えるはずだった。：

しかし、俺は外から聞こえる音で目を覚ました。時間はまだ日が昇っていないから、夜だろう。そして、ふと周りを見て俺は気付いた。

「あれ？ シノブがいないな。あいつどこいったんだろ？」

そのとき、やや遠くの方で何かが爆発したような音がした。多分その音の正体はクリーパーが爆発した音だろう。

「さてよ、クリーパーって自然には爆発しないはず。」ってことはシノブがいるのかもしれない。見に行つてみよう。確か、奥の方にはシノブが明日の準備をしていたはず。あいつが剣とか作つてればいいけど」

それから、急いで拠点の奥にあるチエストの中を見ると、革の防具、石の剣、少しの焼いた牛肉とたいまつがあつた。防具と剣はちょうど1セット分ある。俺はそれをすばやく装備して、たいまつと焼いた牛肉を持ち、さつき音のした方へと走っていく。夜になれば洞窟からモンスターが出てきて家から少し離れればモンスターの数はかなり

のものになつていた。帰り道の目印にするため、たいまつを刺しながら走つていくと走つている人影が見えた。

「おーい、こっちだー！」

俺の声に気付いたのか、人影はこちらに走つてくる。そして、その後ろには、それを追いかけるたくさんのモンスターがいた。

シノブ「助かつた、拠点への道を見失つたんだよ。それにしても、よく気付いたな。」

「そりや、あんな爆音鳴らしてれば気付くよ。ここは静かなところだからね。」

なんとか拠点に戻つてきて、俺は外に出ていた理由を聞いてみた。

どうやら、モンスターの情報を集めようと外に出たらしい。能力のおかげで敵とは適度な距離を保てていたが、情報を集めている間は、生物の位置は把握できないらしく後ろから近づいてきていたクリーパーが爆発した。シノブはその数秒前に情報を集め終わつていてダメージを受けることはなかつたが、その音で周囲のモンスターに気づかれてしまつたらしい。その後、逃げている途中に道を見失いシノブは俺の居場所に向かえばいいと氣付くが、把握しようとするとにも少し時間がかかるようで、その間にクリーパーがもう一度爆発、結局俺の居場所はわからなかつたため、シノブは朝まで逃げるつもりだつたようだ。

シノブ「悪いな、起こしてしまつた上に迷惑までかけてしまつて」

「きにするなよ、これで集めた情報はこれから役に立つし、誰も大きな怪我をしなくてすんだし、この防具にも感謝しなくちやな。まあ、肉でも食つて休んでな。」

シノブ「そうだな、でもすっかり目も覚めてしまつたしそろそろ日が出てる頃だろう。モンスターが洞窟に帰り始めたらここを出発しよう。」

「そんなに早く出発しても体大丈夫なのか？」

シノブ「ああ、問題ないよ。途中で朝ごはんを食べて、なるべく早いうちに村につけるようにしよう。」

「わかつた。じゃあ、それまで俺が外を確認してるから、シノブは寝ないにしても横になつて休んでるといいよ。」

シノブ「そう…させて…もら…う…よ」

そう言いながら、シノブは既に寝ているし、やはり疲れが溜まっているのだろう。「最悪、明日出発でもいいかな」なんて、考えながら過ごしていると日が昇ってきた。それと同時にシノブも目を覚ます。

シノブ「よし、そろそろ出発するか。」

「大丈夫か、結構疲れ溜まつてゐみたいだけど、そしてシノブつてこんなすぐに起きれるんだ。無理すんなよ」

シノブ「俺の体は大丈夫だつて。起きたのも、寝てたんじやなくて横になつて休み

ながら生物の位置を把握していく、モンスターが洞窟に戻るのを待つていただけなんだ  
けどな。それが寝ているように見えるなら、この能力の使用中は相当すきができるみた  
いだな。」

「俺にはその能力が使えないからよくわかんないけど、シノブが大丈夫って言うなら出  
発しようか。あと、昨日の戦いでシノブの剣が壊れかけてたから、新しく作つておいた  
よ。」

シノブ「まじで！ ありがとう。っていうかこれ本当に石の剣？ なんか俺が作つたのよ  
り丈夫そうだけど。」

「そうか？ 同じ材料で作つたから変わらないと思うよ。」

シノブ「丈夫なのはいいことだから問題ないしな。よし、出発だ！」

こうして、俺達は村へと出発した。シノブの能力のおかげでモンスターに遭遇するこ  
ともなく俺たちは全体の3分の2くらいの地点までこれた。あさから何も食べていな  
いため、俺達はここで休憩がてら少し遅い朝ごはんを食べることにした。

シノブ「ここからへんまで来ると村の様子が少しつかめるな。これから行く村の人口は  
80人位の反応があると感じていたが今となつては50人くらいしかないな。何か  
あつたのかもしれないな。ちょっと急いでみるか。」

「そうなのか？ じゃあちよつとペースを上げていくか。この調子なら昼前には着けそ  
う

だな。」

はじめよりペースを上げ歩いていくと、予定通り太陽が真上に昇る前に村に着くことができた。だが、村の様子がおかしい。村の周りを囲っていた柵は倒され、村の中には倒壊している家もある。俺たちは近くにいた村人に話を聞いてみることにした。

「おい、村の様子が変なんだが最近何かあつたか?」

村人「何かあつたって言えるものじやありませんよ。ちょうど昨日村を大量のゾンビが襲つたんです。私達は農民なので戦う道具はありません。これまで村を襲うこともなかつたのに。こここの村は洞窟から離れていて木のような日光も遮るものもないでの、ゾンビはここに近寄ろうとしなかつたのです。」

シノブ「じゃあ、ゾンビたちになにか変化があつたんだろうな。何かが変わつたといふことを感じる出来事はなにかあつたか?」

村人「それが、原因になつたのかはわかりませんがもともと村から少し離れたところにゾンビはいました。そして最近そのゾンビを倒して、我々の農地を広げようという話になつたのです。そこで、村の中で戦える者で少数精銳のグループを作りゾンビの討伐に向かわせました。その中には戦士もいました。しかし彼らが戻つてくることはなく、それで村からは戦士がいなくなつたのです。」

「そうゆうことだつたのか。多分これからもゾンビはやつてくるだろうから、倒してお

きたいな。」

?? 「あのー、あなた方は旅の方でしようか? 私はこの村の村長をして います。」

村長「どうか、この村を襲うゾンビを倒してはいただけないでしようか。無理であれば、大丈夫です。これ以上犠牲者を増やすわけにはいきませんから。その時はどうぞ私達のことは忘れお逃げください。この地は危険です。私達もこれからどこかへ移動するか話し合おうとしているところです。ですが、私達も簡単にはこの土地を離れられなくて…」

「そうゆうことか。シノブビーする?」

俺としては受けたいがシノブが嫌だと言うなら、そのときはやめようか。でも俺は知つてゐる。シノブがこうゆう頼みは断らないつてことを

シノブ「そんなん聞くまでもないよ。受けようぜ。」

「やつぱりな。お前ならそう行つてくれると思つてたよ。」

村長「ありがとうございます。私達にもなにか手伝えることはありませんか?」

「そうだな、まずはこの柵を直そう。それから俺が剣を作つておくから、村人はシノブの指示で村の周りに簡単なものでいいから堀を作つてくれこれだけの人数がいれば間に合うだろう。シャベルは俺とシノブで用意しておくからまずは村人に堀を作らせておいてくれ。」

村長「わかりました。柵くらいなら村人でも作れるはずです。今から急いで作らせておきます。」

それから、村は一気に慌ただしくなった。村人たちが柵を作っている間に俺たちはシャベルを用意する。その作業はほぼ同時に終わった。それから、村人們はシノブの指示の下堀を作る。これで、村が攻められる方向は出入り口を設けた一箇所に絞られる。堀を掘るときに出でてくる石が剣の材料になるから、俺はしばらく作業がなくなる。そのためその間に柵を設置して、その後堀を掘る方に合流。石が掘られ始めたら、俺は村人の分の石の剣を作る。それと、村にある資材は何でも使って良いと言われたので、村にあつた木炭でいまつも作らさせてもらつた。そうして、堀が掘り終わつたのは日が沈み始める少し前のことだつた。

シノブ「みんなお疲れ様。これで、みんなの力だけでこの村は守れると思う。」

村長「みんなの力だけでというのはどうゆうことですか？まあ、ここまでしていただいたので、ありがたいのですが。」

「いなくなるつてことじゃなくて、俺達はこれから、ゾンビたちがやつてくる洞窟そのものを攻略してくるよ。」

村長「そうゆうことですか。でも二人で大丈夫ですか？」

シノブ「ああ、問題ないよ。だつて俺たちはこの…」

シノブがそう話し始めたので俺は急いで、シノブに話を止めるよう目で合図をした。

能力の話はまずいんじやないかと思つたからだ。するとシノブもわかつたくれたらしく

シノブ「この……今までの冒険で培つた経験があるから。大丈夫だつて」

村長「そうですか……わかりました。あなた達がそうおっしやるなら、そちらに任せます。」

「ありがとう、では村は任せよ。じゃあ、俺達は出発するね。」

村長「では、気をつけて。お互いまど明天を迎えるようにがんばりましよう。」

シノブ「おう！ そうだな。」

俺たちはシノブの能力を頼りにしながら、問題の洞窟までたどり着いた。そこで、俺達はゾンビが村に出ていくのを待ち、中にいるゾンビが少なくなつたところに突入することにした。だが、夜までは少し時間があるので、シノブと作戦会議をしていたところだ。

「今回の襲撃の原因は何だと思う？」

シノブ「ゾンビが村に来れるようになったのは、群れの中に頭がいいやつがいるからで、それはゾンビ化した村人、特に村唯一の戦士じやないかと考えている。」

「やはりお前もそう思うか。あと、ゾンビが大量にいる理由だが、ゾンビが群れることは

あつても一箇所にこんなに集まることはないと言えるから、俺は洞窟内部にスポーツブロックがあると考えている。」

シノブ「なるほどな。じやあ、洞窟に入る前に、俺の能力でスポーツブロックを探してみるよ、その部屋にはゾンビがたくさんいるだろうから。」

シノブ「スポーツブロックがありそうな部屋見つけたぞ。それと、ゾンビのいる位置的に洞窟は狭そうだな。大きくて開けた場所と、スポーツブロックのある部屋の二つだけって感じだな。」

「そうか、じゃあそろそろゾンビが移動を始めるだろうから。突入の準備はしとけよ」

シノブ「りょーかい」

それから、しばらくしてゾンビたちの大群が移動をはじめた。みな頭には革の帽子をかぶっている。これで、朝のギリギリまで戦えるようにしていたのか。そして、モンスターにはクラフトができないはずだから、やはり半分村人のゾンビがいるのだろう。そして、この大群の先頭に入る強そうなのが例の元戦士だろう。そして、大群は村の方に移動していき姿を消した。少しは、洞窟にもゾンビを残していくかと思ったが、どうやら全員で村に向かつたらしい。ゾンビは洞窟まで来る村人はいないと予想したのだろう。だから、この洞窟はさつさと攻略して、村人を助けに行こう。

長い夜が、これから始まる。俺は村の無事を祈り、それからシノブに合図を出す。そ

17 マイクラライフ 2日目 ～やっと到着した村だけど何かおかしい!～

して、  
俺たちは洞窟へと向かつた。

# マイクラライフ 3日目(前半) ↗明かされる村長の秘密

!?

俺たちは無事洞窟に着き、スポーンブロックのある部屋の入口まで来て いた。

シノブ「やっぱリスポーンブロックだつたな。けどどうする? 中ではもうゾンビが生まれてきているぞ。」

「そうだなあ、ゾンビって明るいところが苦手だつたよね?」

シノブ「そうだな。ゾンビは明るいところを苦手としているけど、それがどうかしたのか?」

「例えばさ、この部屋の中に俺がたいまつを投げ込んで部屋の中を明るくしたら、アイツらどうなるかな?」

シノブ「そうだな、たいまつは太陽ほど明るくないから、燃やすまではいかなくとも、一時的に動きは鈍ると思うぞ。」

「それだけ効果があれば十分だ。俺がたいまつを投げたタイミングで部屋に入ろう。ゾンビの動きが鈍つてるうちに倒せる?」

シノブ「よし、それで行くか。多分大丈夫だ数も多くないし普通に間に合うと思う。」

シノブの言葉を聞いてから、俺はたいまつに火をつける。部屋に少し明かりが入つてしまつたようでゾンビたちには気づかれたようだが問題ないだろう。俺は部屋の中にたいまつを投げ込むそれと同時にシノブが部屋の中に駆け込んでいき、俺もそれを追いかける。動きが鈍つていればゾンビたちを倒すのは簡単なことだつた。そして、残つた作業はスローンブロックの破壊のみ。そこで俺がスローンブロックを破壊しようとしたとき、シノブが俺に声をかけた

シノブ「なあ、今更なんだけどさ。スローンブロックつて壊しても大丈夫なのか？お前の能力で調べられればいいんだけど」

「確かに何が起きるかわからないし、スローンブロックなんてめつたに見れなさそうだから、ちょっと調べてみる。一応いないとは思うけど、俺が調べてる間敵の反応探してて」

シノブ「りよーかい。」

シノブはそう行つてスローンブロックのある部屋の入口の方へ向かつていった。そして、俺はスローンブロックのことを調べる。わかつたことは、スローンブロックが生まれるというのはとても珍しいということ。モンスターが生まれるときには暗い場所のみで発生するエネルギーが使われるが、極稀にモンスターにエネルギーが使われると同時にその周囲の物質にもエネルギーが当たられるらしい。そうして、ブロックにエネ

ルギーが溜まつていくと、やがて溜められる限界が来る。そのときに溜まつたエネルギーが爆発的に使われ、モンスターが大量に発生するらしい。だから、スポーンブロックを破壊することは爆発的に使われていたエネルギーの残りを強制的に開放させるとめ、大変危険らしい。そして、俺がそれをシノブに伝えると

シノブ「危険なのはわかつたけど、開放したときには何が起きるんだろう」

「それも調べてみるよ」

もう少し時間をかけて調べてみると、新たに2つのことがわかつた。1つは破壊することで、溜まつっていたエネルギーが放出され、モンスターが大量に発生すること。もう1つはそのエネルギーは暗い場所でしか存在できないため、太陽の当たる場所にあるか、たいまつで十分に照らせば問題ないこと。それをおしえると

シノブ「そうか、なら問題ないな。こいつを少しずつ洞窟の外に引きずつていって、朝になつたタイミングでこいつを破壊しよう。このエネルギーに触れることになると怖いから、爆破でもするか。」

「まじで？たしかに、エネルギーが放出されても、太陽が出てるから問題はないかもしけないけど……でも、何かが起きて、このスローンブロックがまた動き出しても嫌だし

なあ」

シノブ「だろ？だから、壊そうぜ」

「わかつたよ、まずは外に運ぼう。そしたら爆弾を作つて爆破しよう。爆弾の作り方は、火薬を手に入れたときに確認してあるし、運び終わつたら、俺が爆弾とスイッチを作るから」

シノブ「ちゃんとした爆弾をつくってくれよ、間違えて爆発したら困るからな」「わかってるよ、さあ運ぼうか。急いで村に戻らないとな」

俺たちがスローンブロックを洞窟の外の太陽がよう当たる場所に運び終わつたのは太陽がのぼり始めた頃だつた。

「なかなかいいタイミングだな。よし、作るか」

そして、俺は能力を使いながら、爆弾とスイッチを作ることができた。そして、これから起爆する。スローンブロックの隣に爆弾を置き、爆弾にスイッチを取り付ける。何が起きるかわからないから、シノブには少し離れてもらつていて。シノブに合図を出し、俺はスイッチをつけ、全速力でシノブの方へ走つていく。しばらくすると後ろから爆発する音が聞こえた。

シノブ「成功したんじゃないか？ スローンブロックから出てる透明なよく見えない霧みたいのが例のエネルギーか？」

「そうみたいだね。能力を使つても、その空間のエネルギーの濃度が高まるほど目に見えるようになつて、見えない状態から、霧、そしてすごく高い濃度になつた場合、結晶

になるんだって。一度結晶の状態になれば安全で、すごい強度があるんだって」

シノブ「そうなのか。おつ、霧が無くなつたぞ。これでもう安全そうだな」

そして、俺達は爆破によつて穴の空いた土地を埋め直して、急いで村へと向かつて  
いつた。

俺たちが洞窟に入つたころ、村では…：

村人「ゾンビたちが見えてきました。村長どうしますか？」

村長「やはり来たか…」では、村の門が閉まつてゐるか確認し、女や子供は建物の中  
に入れさせておくんだ。」

村人「わかりました。よし、そこのお前！門が閉まつてゐるかの確認にいけ。そこに  
いるお前たちで、女や子供が全員家に入つてゐるか確認するんだ！」

村人「いよいよですね。剣がありますが油断はせずにいきますか」

確認に向かわせていた村人が帰つてきた。門はしつかり閉められてゐるが、子供が一  
人みあたらないらしい。その子供は幼いうちに病で母を失い、前回の襲撃の際に父も失  
い。その後は誰かに見られることもなくどこかに行つてしまつていたため、誰も確認が  
できなかつた。

村人「そうか、ではみんなに伝えて回れ、子供を見かけたら、近くの家に入れておく

んだ」

不安な状況で始まつた戦いだが思つたよりも柵は持ちこたえた。しかし、朝になるまでは持たず、柵の一部は壊されようとしていた。

村長「柵が壊されようとしている、私達が外に出て、村になるべく向かわせなようにするから。お前たちで村に来ようと/orするゾンビを倒してくれ。」

そうして村長と15人ほどの村人が柵の外へ出ていき、柵の中には5人ほどの村人が残つた。ゾンビたちはあまり強くなく、前回と違つて剣という戦闘用の道具を持つている村人たちは次々をゾンビたちを倒していく、最後には一匹のゾンビが残つた。すると、そのゾンビは村人たちに話しかけてきた。

？？「久しぶりだな。俺だよ、フリードマンさ。忘れたのかい？村で唯一の戦士をやつていただろ？」

村人「本当にフリードマンなのか？」

フリードマン「そうさ、どうだ俺だつて故郷のみんなを殺したいわけじゃない。だが、みんなはいいものを持っているな。だから、俺達の仲間にならないか？連れてきたゾンビはみんなやられてしまつたが、洞窟に戻つたらみんなゾンビにしてやろう。人間の体と違つて制約もあるが寿命はずつと長い」

村人「ふざけるな！そんなんで俺達がゾンビになるとでも思つたか」

フリードマン「ざんねんだよ、僕だつて手荒な真似はしたくなかったんだけどね。いくら装備で日光を遮つても太陽が出れば動きは鈍つちやうし、今日は戦いに出てる分だけでも持つて帰ろうかな」

そうゆうとフリードマンは駆け出し、村人たちを次々と剣の持ち手の部分で殴り、気絶させていった

フリードマン「安心してくれ、殺しはしない。殺してしまつたらゾンビにはできないからね」

そして、草原に立つてるのはフリードマンと村長の二人だけになつた。フリードマンは村長も氣絶させようとすると、村長は持つていた剣で受け流した。

フリードマン「やつぱり、あんたは他の奴らとは違うな。なんで戦士であることを隠して農民をやつてゐるのさ”父さん”」

村長「それをお前にゆう必要はない。こんなやつは自分の息子でも同じ村の仲間でもなく、怪物なのだから」

フリードマン「怪…物。僕が怪物だつていうのかい？父さんいい加減現実を見るんだ。どうするのが村の繁栄のためなのか。こんな貧弱な体でくらしていて、窮屈だらう？さあ、僕の手をとるんだ」

そういうつて、フリードマンは村長に手を差し伸べた。

村長「なぜ、他の奴らのように気絶させない。挑発しているのか？」

フリードマン「それも事実かもしれない。技術では勝てなかつたけれど、今なら勝てるだろう。だがちがうよ、これは、父さんを傷つけたくないという息子としての思いと、尊敬していた父さんに対する敬意の気持ちだよ。」

村長「そうか、そりやありがとな」

フリードマン「やつとわかつてくれたのか父さん、あんたならわかつてくれたと信じて…」

そのときフリードマンは勢いよく差し出していた手をもどした。なぜなら、村長が剣をその手めがけて振つたからだ。

村長「よく避けたな。あのときのお前だつたら一発受けていたところだな。俺が本当に仲間になるとしても思つたか。お前なら知つているはずだぞ。俺がこういうときは、相手に従うことなく戦いを挑み、命をかけて戦うようなやつだつてことを！こい、フリードマン！お前の仲間になるくらいなら俺は死を選ぶさ！」

フリードマン「ああ、そうだ、思い出したよ。あんたは昔から変わらない… 大馬鹿者だつてな！！」

そしてフリードマンは村長に剣を振るう、最初は村長も受け流せたが、やはり体の作りが違うのか少しづつ動きの速さに差が生まれる。そして、とうとうその時はやつてき

た。村長が剣を受け止めて生まれた一瞬のすきをフリードマンは見逃さなかつた。村長にめがけてフリードマンは剣を振り下ろす。

フリードマン「死ねええええ」

しかし、その剣が村長に届くことはなかつた。気がつくとフリードマンは地面に倒れていた。そして、フリードマンの上に登つて木の剣に見立てた棒きれでフリードマンのことを叩く一人の少年。この少年が家にいなかつた少年であることはあきらかで、また、この少年が殺されるであろうことも明らかだつた。村長は最後の力を振り絞り、少年を助けようとした。しかし、フリードマンはそれよりも早く少年の首を掴み村長にこういった。

フリードマン「おい、今ここであんたがゾンビになるといえбаこの子供も村にいる他の奴らもゾンビにすることをやめ、ここにいる男たちだけで我慢しよう。それだけで十分な戦力になりそうだからな。だが、お前がそれを断ればどうなるかはわかるよな?」

村長「くそっ…そんなことまでして恥ずかしくないのか?それに、そんなんでゾンビにさせられても俺はお前のことを殺すことに変わりはないからな。」

フリードマン「そんなことは問題じやない。ゾンビになればみんな一緒だ。群れに入ればわかるさ。殺そうという気が湧くこともない。」

村長「そうか、ならかつてにしろ。だが、まずはその子供を開放するんだ。」

そう行つたら、フリードマンは少し離れたところに子供を投げた。そして、フリードマンは村長にこういった。

フリードマン「もう手は差し伸べないよ。次に目が覚めたらゾンビだ…な…」  
フリードマンはそう行つて剣を振り上げたがその剣が振り下ろされることはなかつた。それは、フリードマンの体に後ろから剣が刺されていたからだ。そして、もう一本。そうしたら、フリードマンは手から剣を離しそのまま倒れていった。フリードマンは最後の力を振り絞つて、自分に剣を刺したやつのことを見ようとした。そこにいたのはシノブたちであった。すると、フリードマンは剣の方に手を伸ばそうとする。殺せなくてもいい。せめて傷の1つでもいい、あいつらにつけられれば。だが、それを察したのか村長が剣を手に取りフリードマンの命を奪つた。そして、最後に村長は「昔はそんな戦い方をするやつじやなかつたのに…」「俺たち”どこで道を間違えたんだろうな」そう言つた。

こうして村を襲うゾンビの問題は解決され、村に再び平和が訪れた。